

かぜのきざし

2021 NOVEMBER

風の萌

特定非営利活動法人(NPO)
地域共生を支える医療・
介護・市民全国ネットワーク

長崎おおむら大会
特集号

2021年11月20日

長崎おおむら大会を振りかえって



長崎おおむら大会 大会長 石田 賢二

今大会は、昨年の9月に開催予定でしたが、この全世界のコロナ禍の中で、1年間の延期を余儀なくされました。

さらに、ここ2年にわたる大会準備期間中は、度重なる「コロナ蔓延」にて、幾度となくこのような状況下での大会開催の是非を考え、思い悩む日々もありました。

しかし、過去25回を数える「全国の集い」を延期するのはまだしも、中止するということは将来に禍根を残すと思う、さらにこの長崎おおむら大会を、今後のwithコロナ時代の大会開催の試金石にするしかないという腹を括り開催に漕ぎ着けました。



今大会は、これまでの「全国の集い」の現地参加形式とは全く異なり、初の試みではございますが、非接触型完全リモート形式

での開催といたしました。

本来は、ここ長崎おおむらまでお越し頂いて、リアルで皆様方と広く意見交換し、懇親の場では長崎らしい「おもてなし」を準備致しておりましたが、それが果たせず甚だ残念でなりませんでした。

今大会は、発表演題数は少なく気を揉みましたが、各セッション参加者は、9月19日は延べ1,515人、9月20日は延べ1,121人のアクセスを数え、さらに、「すべてのセッションにアクセスでき、最後まで参加できた」という「ありがたい意見も頂きました。気軽にWebで参加して頂くのも、今後のwithコロナの時代には、大会の開催形式のひとつになるのかも知れません。

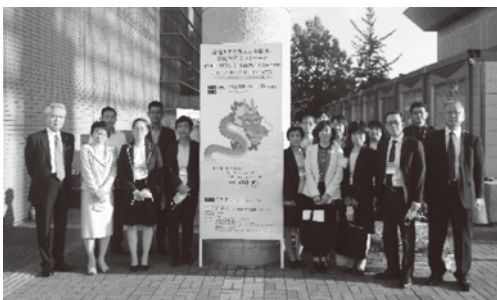
また、今大会は「NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク」を冠する最後の大会であり、長崎おおむらでお引き受けしたのは、黒岩卓夫名誉会長をはじめ先達の皆様が「診療所ルネッサンス」を高らかに唱い、在宅医療の黎明期から発展期、充実期へと頑張つて来られた姿を、私のように、その当初から見続け

てきた数少ない者の使命かなという思いからでした。

また、このネットワークの創設メンバーのおひとりである藤村淳子氏の長崎おおむら大会に懸ける強く熱い思い(「長崎おおむら大会までは生きるんだ」)からでもありました。第2日目のランチョンセミナー「贈る言葉」ネットワークの生みの親とも言える3つの診療所のメンバーが語る今後の在宅医療とネットワーク活動」での発言が、同氏の最期のメッセージとして、我々の心に深く刻み込まれました。今大会を見届けられ、去る10月1日にご逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

今年11月には、「地域医療研究会」と合併し、「NPO地域共生社会を支える医療・介護・市民全国ネットワーク」と改め、スタートを切るわけです。

このネットワークが、今後の更なる超高齢少子社会の中での「地域共生社会を支えるための支柱的存在であり、その思いを全国津々浦々へ発信し続けることに微力ながら尽力していきたいと思っております。



長崎おおむら大会 メインシンポジウムの概要のまとめ

大会長 石田 賢二

長崎おおむら大会のテーマは、『ちゃんと決めんば、自分の最期～すべての人に最期はくる 地域で育む人生会議～』です。

このテーマの背景には、国家レベルで、今後予想される「高齢多死」の対策に手を拱いていると、2030年の日本では、年間死亡者数約165万人、医療機関での看取り89万人、介護施設での看取り9万人、自宅での看取り20万人、残り47万人は“死に場所探し難民”となります。すでに国は、ここ30年間で、“死に場所探し難民”を出さないために、「地域包括システム」というビジョンを映し出しています。国民の多くは、“自宅で最期を迎えたい”と思っているにも拘らず、病院での看取りが大多数です。将来の推計死亡者の内、病院、介護施設などでは対応できない47万人もの“死に場所探し難民”の看取りの場は、どうなるのでしょうか？諸事情を加味しても答えは「在宅」でしかあり得ません。

年々、在宅医療が国民に浸透してきたとはいえ、あと10年後にどれだけの方を「在宅で看取れる医療」が提供できるのでしょうか？今ここで、“受け皿”となる在宅医療の更なる整備と国民の意識改革が必要だと思えます。

メインシンポジウムでは、まず、第一部の「在宅医療が広がらなかったのは何故か？在宅医療への取り組みからの自己総括と今後への課題」として各シンポジストの発言から浮かび上がった課題が次の通りです。

1. 在宅医療の価値、本質が解っているのか？という根本的な問題に対して

1) 医師側の問題 2) 市民側の問題 3) 行政も関わる問題

2. 在宅医療の“地域差”の問題

3. 在宅サービスの遅れ（フォーマル、インフォーマル）の問題

4. 高齢者の住まいの問題

についての議論がなされました。

黒岩卓夫氏からは、高齢者（老人）は己を知り、地域・歴史を語り、医療者は在宅医療の価値を高め、在宅療養と看取りを語り、誰でも65歳になったら、エンディングノート（エイジングノート）を作ろうという提言がありました。

辻哲夫氏からは、現場実践から政策を作り日本を変えることが必要で、在宅ケアの充実の鍵は地区医師会を動かすことと市町村の職員を育てることとの提言がありました。苛原実氏、大石佳能子氏からは、各問題点に対する政策的提言もなされました。

第二部の「今後のwithコロナ、afterコロナ時代を見据えた地域包括ケアは？」として、コロナ禍においての保健所・病院・かかりつけ医や行政との連携のあり方について、新田國夫氏から国立市、小倉和也氏から八戸市の紹介がありました。共通していたのは、地域包括ケアは、平時もwithコロナの時も変わらないこと。平時からきちんと地域包括ケアシステムを構築することの重要性と今のwithコロナでの対応が、そのまま地域包括ケアシステムの構築になるということを確認しました。

共催である大村市長園田裕史氏からは、「死にたい町大村」を目指しているとの発言がありました。「死にたい町」は「人生の最期の時を過ごしたい町」もちろん元気な時も住みたい町です。また、大村版「人生ノート」は、ノートを配るだけでなく、書き方講習とセットになっているという特徴を持っており、その書き方講習は、まさしくACP人生会議そのものでした。

長崎おおむら大会 実践交流会報告

実践交流会はハイブリッド方式で開催予定でしたが、大会が全面リモートでの開催になった事で実践交流会も初めてのリモート開催となりました。大会事務局や発表者の方々の準備のおかげで大きなトラブルもなく、すばらしい実践交流会となりました。

在宅生活の継続	
演 題 名	発表者
家族の同居支援による転出・転入ケースの経験から ー ケースの生活満足度と家族の介護負担 VAS 調査の報告 ー	今村 太泉
在宅継続を考える～本人が望む暮らしの維持支援～	灰瀬 美和
終活についての意思表示に関する調査 ー 大村市における「人生ノート」の活用実態 ー	馬場 保子
在宅継続を考える ～本人が望む暮らしの維持支援～	黒木 みほこ
認知症高齢者の独居生活の継続について	竹村 真一
「在宅医療に期待すること」のアンケート結果報告	志村 緑

緩和ケアと看取り	
演 題 名	発表者
「叶えてあげたい！」ご本人・ご家族が強く望む在宅死	林 より子
コロナ禍における非がん患者の終末期ケア ～介護施設から在宅へ～	黒瀬 敦子
家族と一緒に入院し、お看取りを行った2症例について	小川 越司
『コロナ禍での本人様らしい看取り』 ～前向きな選択による在宅生活～	石川 努
チョコっとお花見 ～コロナ禍における看取りで家族や私たちができること～	黒田 愛莉

地域で支える認知症ケア	
演 題 名	発表者
重度認知症の方々とグループ精神療法の試み	勢島 奏子
「本人らしく安心して過ごせる居場所づくり」 ～小規模多機能ゆ～らりの役割～	森田 雅彦
認知症の方への感染対策の促し、 およびワクチン接種のための意思決定支援	金生 浩司
認知症対応型高齢者グループホームでのクラスター対応	日下部 三千代
その人らしさを大切に深く寄り添う ～特養における認知症の方の実例をととして～	服部 令華

地域包括ケア	
演 題 名	発表者
専門職と地域住民が共に学び理解しあえる地域を目指す	黒岩 尚文
在宅生活を支える、老健のあらたな取り組み	藏元 隆史
有床診療所が担う重症心身障がい児支援	大谷 博美
コロナ禍、近未来を見通せぬ地域のジレンマ ～その鍵は地域行政との共感的互恵関係～	長縄 伸幸
特養から発信する地域包括ケア	松木 裕子

訪問サービス & 通所サービス	
演 題 名	発表者
天気と認知機能について	山田 春樹
ワクワクトークを通して ～利用者さんの心の変化について～	上村 喜春
コロナなんかには負けない ～安心な暮らしを守りたい～	藤村 さつき
特養から自宅に帰るための支援	安藤 貴子
通所サービスにおける 新型コロナウイルスワクチン巡回接種の試み	大澤 誠
1%でも幸せに・・・	東北 浩仙

人材育成・教育	
演 題 名	発表者
「日本財団在宅看護センター」起業家育成研修7年間を 振り返って ～事業拡大の要因を考える～	喜多 悦子
文化の違いを乗り越えるために	デヴィオ ジョアンナ デクスター・オルダス
訪問看護が生活課程を整えるとはどういう事なのか？	井手 加奈子

口腔ケアと栄養管理	
演 題 名	発表者
小規模多機能による関係構築 ～出会いから最期まで～	服部 和成
管理栄養士が多職種と連携して訪問栄養指導を行い、 在宅生活の継続を支援した一例	町山 裕美
食形態選択における葛藤 ～リスク管理と QOL ～	尾川 真菜
最期まで口で食べることの喜び	鍛本 文子
神経難病患者の口腔ケア	大川 延也

新しい試み	
演 題 名	発表者
高齢、一人暮らしを見守るためにご家族が行った環境調整	川瀬 真由美
訪問診療と訪問看護の看護業務統合への取り組み	渡辺 ななみ
新型コロナウイルス感染症をのりきりたい ～小規模多機能事業所だからこそできた取り組みと課題～	岡本 さとみ
あいち診療所おふくろ「看護外来」の苦悩と希望 ー 自死をふせげなかった患者との関りを通して ー	雨堤 ルカ
みんな GOZARE (ゴザール) で共生社会のまちづくり ～新たな共感型支え合い社会に向けた出会いと学びの場づくり～	吉田 理

薬の医療介護連携	
演 題 名	発表者
在宅医療における薬剤師の役割 ～チーム医療の一員として～	勝村 俊幸
調剤薬局を会場に利用した 新型コロナウイルスワクチンの個別接種	門下 鉄也
在宅医療での睡眠導入剤の適正使用への取り組み	本多 裕子

佐倉プレ大会報告

大会長 三嶋 泰之

2021年5月15日、全国の集いin長崎をおむら大会2020へ向けて「コロナと人生会議」をテーマにしたプレ大会を、さくら風の村訪問診療所主催にて開催致しました。

開催に先立ち、2020年11月と2021年2月に23の近隣医療機関に対してアンケート調査を実施し、その結果からコロナ禍という状況で人生会議の必要性がますますクローズアップされました。この会の開催により人



と人との交流が思うようにできない現状でも、可能な限り人生会議を開こうとする思いを持つ人が増えることを期待し、人生会議の必要性、重要性を改めて考える一つのきっかけとなることを願いました。

冒頭に私からアンケート調



査結果の報告をし、その後在宅側の立場としてケアマネージャーから、病院側の立場として大学病院医療連携室の社会福祉士から、最後に葬儀社社長からそれぞれ発表していただき、まとめとして討

論を実施致しました。

アンケート調査からは病院も在宅も懸命に対処していることが明らかになりました。葬儀屋も亡くなった方を待っているだけではなく、事前相談も含めてしっかり対応していることが分かりました。面会制限等で直接会う機会が減ってしまったために病状理解が困難となっている点もありますが、病院と在宅の連携の重要性を再認識致しました。もちろん、コロナ禍だから何か特別なことをするというのではありません。

聴講者数は68人と予想を大きく下回りました。長崎県からの参加がなかったのは悔やまれます。企画・発表から開催当日までの期間が短く、会の開催の周知が十分ではなかった

ことが原因と考えます。

WEB開催は当ネットワークにおける本大会、プレ大会での初めての試みでした。会の運営全般を木村情報技術株式会社に委託しました。私が会場に到着した時点ではほぼ全ての準備が完了しており、立派な進行台本が作成され、案内に従っていけばいいだけの状態。終了後、当日中にメールで「視聴者一覧(氏名、所属、都道府県、視聴開始時刻が記されているもの)」「視聴者からの質問内容」「配信映像」が届いて大いに助かりました。機材の設置、撤収も全てこの業者が請け負い、主催者である私は会場に行って喋るだけで済み、運営上の苦労は一つもありませんでした。しかし会の開催にかかった費用は約89万円(うち業務委託費約70万円)で、この程度の規模の会としては大盤振る舞いでしょう。今後はWEB開催が普通のものとなっていくことが予想され、在宅ケアに関わるどの事業所でも主催できるような対策を検討すべきと感じました。

コロナと人生会議を結びつけるのはかなり強引だったかもしれないが、コロナという災いが人生会議を行うためのきっかけになるのなら、多くのの人にとって人生会議がより身近なものになるチャンスではないでしょうか。



藤村淳子理事 追悼文

NPO 在宅ケアを支える診療所市民全国ネットワークの創設者の1人である藤村淳子理事が2021年10月1日にご逝去されました。心よりご冥福申し上げます。

藤村淳子のこと

医療法人あいち診療会 理事長
社会福祉法人淳涌界 副理事長

畑 恒土

藤村淳子は2021年10月1日に逝った。49日も過ぎないうちに追悼文を書けという残酷な指令がきて、空白の頭で書く文章であることを承知していただきたい。

私が彼女に初めて出会ったのは開業する前の新生会第一病院である。「看護婦には共に働く看護婦と、指示して使う看護婦がいる」が持論であった私に、婦長だった彼女は「うちの看護婦は全員共に働く看護婦です」と言い切った。そんな彼女に「頭空っぽにしてキャップかぶって歩くなバカ」と言われた看護婦は数知れない。

藤村淳子は「私は医者を使う看護婦になる」と公言し、私は使われることを喜びとしてきた。(ここまでは看護婦でした)

病院時代、彼女は病院の職員だけでなく地域の看護師にも開放した看護概論の勉強会を企画した。それが看護科学研究会東海支部につながるものであったが、手伝ってほしいと頼まれて1年間その資料を作成し勉強会にも参加した。その結果一番勉強させられたのは私だったかもしれない。

医師は病気を診る。病院では看護師は医師の補助をする役割を担い主体性を発揮しにくい。しかし看護師の本来の仕事は生活を看ることである。在宅医療のように生活の中に医療が入っていくとき、その最終目的は患者さんの幸せである。その幸せが何かを捉えやすいのは病気を診る医師ではなく、生活を看る看護師である。私たち医師は患者さんの幸せを実現しようとするとき、患者さんの幸せに照準を合わせた看護師に使われるのが自然の成り行きである。(と私は思う)

残念ながら昔「成績の良い」看護師が保健師になったように、看護師の上位資格かのように特定看護師を目指すものが多い中、対象の幸せを対象と共有して生活を看る看護師が少なくなっている。藤村淳子が言う「すごい看護」はそこに存在するのに。

藤村淳子さん

君は死ぬまで私と描いた夢に向かって歩き続けたね。心細いけど私は一人になってもその夢を追いつけるから見守ってほしい。逝くときには腹を減らしていくから待っていてください。

合掌

追伸：藤村淳子(法名：釋淳涌)は大村大会までは生きると宣言してランチョンセミナーに参加しました。そのランチョンセミナーの動画と、NHKの福島弘明氏が作ってくれたメッセージ動画をYouTubeで公開します。(あいち診療会、淳涌界のHPにリンク作ります。)

12月5日にお別れの会を開催します。よろしかったらお出かけください。

場所：いちやなぎ中央斎場 春夏秋冬の間

(名古屋市千種区千種2丁目19番1号)

時間：14時～16時

合同研修委員会報告

地域医療研究会とNPO法人 在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワークは、「合同研修委員会」を持ち、毎月一回のウェブ会合を行っています。現在の委員は、大西康史医師(リハビリテーション専門フリーランス医師)、小倉和也医師(はちのへファミリークリニック)、北澤彰浩医師(佐久医療センター)、黒岩巖志医師(佐久医療センター・小海病院)、長純一医師(宮城県知事選挙候補者)、吉沢徹医師(諏訪中央病院)、和田忠志(いらはら診療所)の7名です。



いらはら診療所
和田 忠志

本委員会は、地域医療・地域包括ケアに関する深い洞察と技能をもつ医師を養成しようとするのがその目的です。具体的には、日本専門医機構の総合診療専門医養成プログラム、および日本プライマリ・ケア連合学会の新家庭医療専門医養成プログラムを保有し、総合診療を目指す医師に参入していただき、卒業生を輩出していきたいと考えています。今年度、すでに、総合診療専門医プログラムを作成し、一次審査を合格し、二次審査結果を待っているところである。新家庭医療専門医プログラムについては現在作成中で、本年末までに完成し、申請する予定です。

このプログラムは、過去に地域医療研究会が保有していた家庭医療専門医プログラムの延長線上にあります。その理念は一言でいえば、「主治医の思想」です。患者を総合的に診る医師については、「総合医」「家庭医」などと呼ばれるが、これらは、あくまでも、医師が特定の領域を学び、そのように宣言しているに過ぎません。しかし、主治医は、「患者さんが選ぶ」ものです。患者さんとの関係性の中に主治医の本質があります。つまり、単に医師が総合的な知識・技能を学ぶのみならず、患者さんや家族との関係性の中で、そのニーズに応じていく、更には地域のニーズに応じて自らを変容していくような医師像をイメージしています。

現在、委員会が作成しているプログラムは、委員が所属している医療機関だけを研修の場としている点において暫定的なものと考えています。今後、2団体の合併後は、新法人の研修プログラムとし、新たな委員も加え、また、新法人所属医療機関や医療機関以外の事業所との連携も行いながら、よりよいプログラムを作成し、専攻医を獲得したいと考えています。特に、新法人所属医療機関の若手医師の参入を期待しています。皆様のご協力をどうぞよろしくお願い致します。

第20回通常社員総会 報告

開催日時…令和3年9月20日(月・祝)

午前8時30分から午前8時50分まで

開催場所…いらはら診療所(WEB)

出席者数…正会員51名のうち41名出席(表決委
任者14名含む)

・第1号議案

2020年度(令和2年8月1日から令和3年7月31日まで)事業報告の件

・第2号議案

2020年度(令和2年8月1日から令和3年7月31日まで)活動計算書及び監査報告

・第3号議案

2021年度(2021年8月1日から2021年7月31日まで)事業計画承認の件

・第4号議案

2021年度(2021年8月1日から2022年7月31日まで)活動予算書承認の件

・第5号議案

定款変更承認の件(定款は、ホームページからご確認ください。)

地域医療研究会との合併を見据え、会の名称、目的、会員の心得、会員種別、会費等の変更今後の会の目的の達成、事業推進のため

常任理事や委員会設置等の追加。

地域医療研究会との合併により、当法人は「NPO地域共生を支える医療・介護・市民 全国ネットワーク(略称…地域共生全国ネット)」に名称が変わりました。

・第6号議案

役員選出の件

【留任理事】(50音順・敬称省略)

秋山由美子

石田一美

石田賢二

苛原実

内門丈夫

内田直樹

大石佳能子

大川延也

大澤誠

太田秀樹

岡崎和佳子

沖倉紅児

小倉和也

金井秀樹

金田弘子

桑原由次

小山亨

菅原由美

瀬尾利加子

多湖光宗

長純一

中嶋啓子

中島肇

長縄伸幸

畑恒土

萩田均司

福田善晴

藤村淳子

松永平太

三嶋泰之

宮坂圭一

宮崎詩子

村山善紀

森本益雄

吉永隆行

【新任理事】山岸大輔

【留任監事】黒岩海映

玉井典子

新任理事 就任の抱負



山岸 大輔氏

この度ご推薦下さり本当に有難うございました。歴史あるNPO法人理事の皆様方の中で初めての介護職だとお話を伺いました。大変恐縮に存じます。

私は街づくりが好きです。認知症になっても、高齢になっても住み慣れた場所で最期まで生活ができるような地域を作り上げていきたいと考えております。そのために力を発揮させていただければ幸甚に存じます。どうぞよろしくお願い致します。

今後の会議日程

【理事会開催日】

第2回理事会 2022年1月23日(日) 東京Web

第3回理事会 2022年4月24日(日) 東京Web

第4回理事会 2022年8月28日(日) 東京Web

【常任理事会開催日】

第1回常任理事会 2021年12月19日(日) 東京Web

第2回常任理事会 2022年3月27日(日) 東京Web

第3回常任理事会 2022年7月19日(日) 東京Web

地域共生を支える医療・介護・市民全国ネットワーク

第1回全国の集い IN SYONAN HIRATSUKA 2022

地域共生社会はみんなで支える。
誰もが安心して暮らせるまちをつくる。

大会長 内門 大丈(メモリーケアクリニック湘南 院長)

開催日：2022.9.18(日)～19(月・祝) 会場：平塚プレジール(神奈川県平塚市)

プレ大会を開催してみませんか？

2022年の全国の集いが神奈川県平塚市で開催予定です。本大会に向けてプレ大会を開催してみませんか？

【プレ大会とは・・・】

全国の集いのテーマや企画に関連があり、ネットワークとして応援したいもの。

【認定】

プレ大会と認定するか否かの判断は本大会長に一任する。

【目的】

プレ大会の目的は以下の通りとする。

- ① 全国の集いで取り上げる問題について予め理解を深め、より活発な議論を行う基礎を作る。
- ② 全国の集いをはじめとした当ネットワークの活動を周知し、仲間の輪を広げる場とする。
- ③ 全国の集いの開催地域を盛り上げ、会員同士の交流の場とする。

【条件】

プレ大会はNPO法人として予算を出すものと予算を出さないものに区分される。それぞれの条件は以下の通りとする。

●予算を出すもの

- ① 計画書の提出を受けて理事会で決定する
- ② 支給金額は20万円を上限とする。

基本要件は以下の通り

- ▶当ネットワークが共催するものとする。
- ▶5人以上の会員が入った実行委員会を作って運営する。
- ▶会長・副大会長のいずれかは医師以外とする。
- ▶会員(準会員含む)の参加費は無料とする。
- ▶ネットワークの趣旨や活動を伝える機会、もしくは大会長、会長またはその代理の挨拶の機会を設ける。
- ▶配布資料、活動報告、収支報告の提出を必須とする。

●予算を出さないもの

- ① 上記(第4条2項)の基本要件を満たさないもの
- ② もともと計画されているもの、定期的で開催されてきたもの

予算を出さないものでプレ大会との名称を使用する場合、以下の要件を満たすこと

- ▶当ネットワークが共催又は後援するものとする。
- ▶ネットワークの趣旨や活動を伝える機会、もしくは大会長、会長またはその代理の挨拶の機会を設ける。

- ① 配布資料、活動報告を提出する。